

映画でフランス語・フランス文化を教える（学ぶ） ——エリック・ロメール『緑の光線』の場合

南 直 樹

はじめに

2008年度の日本フランス語フランス文学会秋季大会において、〈Pourquoi enseigner le cinéma?〉（「なぜ映画を教えるのか？」）と題されたワークショップが開催された。その報告書の中で「映画は言語の授業における媒体であるばかりでなく、それは文化と文学に単刀直入に入ることを常に可能にする」（日本フランス語フランス文学会、cahier 03、mars 2009、p.14）と述べられている。エリック・ロメールの『緑の光線』はこうした見解に最も相応しい映画の一つだと言える。なぜならこの映画で話される台詞は現代フランス語口語そのものであり、文学的にはジュール・ヴェルヌの同名の小説『緑の光線』を発想源にしており、文化的には現代パリジェンヌの心性、すなわち自我の強さ、ヴァカンス観、恋愛観、人生観、さらには宗教観も知ることのできる作品であるからである。

エリック・ロメール（1920-2010）は、ジャン・リュック・ゴダール、フランソワ・トリュフォー、クロード・シャブロール、ルイ・マル等とともに、いわゆるヌーヴェル・ヴァーグを代表する映画監督の一人であるが、その才能が壮年・老年になって開花したシネアストである。日常的な情景のなかにおける恋の形を描いて、彼の右に出る映画作家はいない。

映画『緑の光線』はロメール中期の「喜劇と格言劇」シリーズのひとつで、孤独をかこつひとりのパリジェンヌが試練と彷徨の末、最後に真の幸福の鍵を見出すという物語である。パリで秘書をしている主人公デルフィーヌは、楽しみにしていたギリシャへのヴァカンス旅行を友人にドタキャンされ、行き場を失って、シェルブール、ラ・プラーニュ、ピアリッツなどを訪れ様々な人に出会うが、どこも居心地がよくない。彼女の（半ば無意識的に）求めているのは、「自分にふさわしい居場所、自分にふさわしい恋人」なのである。「欲求不満の塊で泣いてばかりいるヒロインは、最初は観客の共感を拒むが、次第に私たちの心に入りこんでくる。なぜなら彼女は私たちの等身大の姿だからだ。ロメールのまなざしは人間に厳しくも寛大である」（中条省平の『決定版！フランス映

画200選』清流出版、2010、p.339）。

この映画の中の台詞は、あたかもあらかじめ決められた台詞がないかのごとく——実際、ロメールはあるインタビューにおいて、『緑の光線』は「全編がシナリオなしの即興演出で撮られた」と述べている（蓮実重彦『映画狂人のあの人に会いたい』河出書房新社、2002、p.213）——日常的な自然なフランス語によって展開してゆくので、それを観る（聴く）者はあたかもフランス人の話している現場に立ち会っているかのような臨場感を抱くことができる。

ちなみに、この映画に付された格言は、アルチュール・ランボウの「Chanson de la plus haute tour」（『一番高い塔の歌』）の中の、

Ah! Que le temps vienne
Où les cœurs s'éprennent.

「ああ！心と心の燃えあう時よ来い」の詩句である。

そしてこの「緑の光線」とは一体なんのことであろうか？それは太陽が海に沈む時に最後に放つ光線のことであり、極めてまれにしか見られない自然現象である。この光線を見た者は人の心が読めるようになったり、幸福になれると言い伝えられている。しかしこの緑の光線は更に究極的な意味を持つものである。それはこの小文の最後に明らかにされる。

映画は日記体の描写を取っているので、ここでもそれに沿って各場面を記述してゆくことになる。

7月2日 火曜日 パリ

冒頭の短いシーンで、会社のオフィスにいるこの映画の主人公であるデルフィーヌに電話があり、彼女がなにか困難な状況に陥ったらしいことが示唆される。

7月3日 水曜日 パリ

日差しの強いガリエラ美術館の中庭で、ヴァカンスの予定を話し合うデルフィーヌとマニュエラの会話。デルフィーヌは、カロリーヌからヴァカンスと一緒にギリシャへ行くという約束を突然一方的に反故にされたことを告げる。恋人のアントワーズとヴァカンスを過ごすことの決まっているマニュエラは、彼女はこれからどうする

のか尋ねるが、デルフィーヌは答えられない。マニュエラは「それでもあなたは誰か男を見つけれられるわ」と慰めるが、「これから2週間で？あなた頭おかしいわ」と云うデルフィーヌ。そして彼女は「それじゃ、辛いわ！一人ぼっちのヴァカンスなんて」と嘆くが、この映画の主旋律である主人公の「孤独」のテーマがここで既に提示されている。

このシーンでの語学的に学ぶべき表現は « J'ai mal aux yeux. » (「眼が痛い」) の « avoir mal à » の慣用句ぐらいだが、少し難解な点は、デルフィーヌがマニュエラに発する « Tu es tombée sur la tête! » (「あなた、おかしいわ!」) の言い回しであろう。

7月4日 木曜日 パリ

パリ郊外の実家で、「祖父」を囲んでヴァカンス論議をするデルフィーヌとその家族の会話。この「祖父」は彼女の実際の祖父であるとのこと。「ヴァカンスの間何をするの?」と尋ねるデルフィーヌに、祖父は「私かい？何もしないよ、私は年金生活者なんだ。引退しているんだ！それで家事の手伝いをする、それがわたしのするすべてだよ」と答える。祖父は昔タクシーの運転手をしていて、8月はヴァカンスをとる権利があまりなかったこと、それでも遅くにジュラ山脈のフォシル峠とスイスの国境の間でヴァカンスをとったこと、田舎のある人の家でヴァカンスをとって、家畜や庭の世話をしたことなどを語る。彼はそれでも山は好きではない、「なぜならパリを運転することにとっても慣れてるから」と述べる。そして「あなたはパリジャンですね」と言う家族の言葉に、「そう私は真のパリジャンだ」と祖父は答え、「パリは快適だ！ここには散歩するのに必要なものはすべてある！大きな公園もあるし...」という彼の言葉に対して、「いいえ、無いわ...自然が無い、海がない！」とデルフィーヌは反論する。ここで彼女がヴァカンスで願っているものは、本当の自然であり、海であることが示される。

7月5日 木曜日 パリ

パリ郊外の姉妹のアパルトマンを訪れたデルフィーヌが、彼女のヴァカンスでの本当の望みを打ち明ける場面。最初はデルフィーヌと姉夫婦のアイランド談義が交わされるが、次いで姪のレティシアとの会話が始まる。「アイランドに行ったことはあるの?」と尋ねるデルフィーヌに、レティシアは「いえ、まだない」と言い、また「外国へ行きたいの?」という問いにも「いいえ、行きたくない」と答える。デルフィーヌが「でもそこは外国よ、アイランドは」そして「で、なぜアイランドが気に入っているの?」と尋ねると、レティシアは「なぜならそこは美しい国だから」と答える。デルフィーヌの「どうしてそこが美しい国だと知っているの?」という問いに、レティシアは「なぜなら...イザベルが私にそう話したから」と言う。「ああ、イザベルがそう話したの！ずっと雨が降るのよ。怖くない?」と前者が言うが、後者は「い

いえ」と答える。それを聞いていたイザベルが次のように発言する。「ねえ、なぜこの夏あなたはダブリンへ私たちに会いに来ないの? ママは会いに来たわ、クロードとドミニックも会いに来るでしょう。実は家族の中でもうあなただけよ」。これに対してデルフィーヌは次のように答える。「夏は、よく分からないけど、私は少し変えるために、暑い国に行くほうを好む。私は太陽を変えたいの、それだけのことよそれはあなたたちに関係ないわ、でも行くかもしれない、別の日に行くわ、いつか分からないけど。でも8月は、私は少し海を見て、海水浴して、肌を焼きたいの、それだけのことよ」。ここにデルフィーヌがヴァカンスに真に望んでいるのは、海の上に照る熱い太陽であることが表明されている。ここでこの映画の格言として掲げられたランボーの別の詩篇 « L'Éternité » (『永遠』) の中の次のような詩句を想起することに理があるだろう。

Elle est retrouvée.
Quoi?—L'Éternité.
C'est la mer allée
Avec le soleil.

「あれが見つかった。何が?—〈永遠〉さ。太陽と連れ立って行っちゃった海さ」。その帰りにデルフィーヌは道端にスペードの女王のトランプカードを見つける。

フランス語として学ぶ点は、経験を表す複合過去 « Tu as déjà été en Irlande? » (「アイルランドに行ったことがあるの?」) と慣用表現 « avoir envie de » (「～したい」)、そして天候を表す非人称表現 (« il pleut ») などである。

7月6日 金曜日 パリ

山に籠もっている元彼のジャン=ピエールからの電話。デルフィーヌはギリシャ旅行は中止になったこと、山に行って一人ぼっちになるのは嫌なことなどを伝える。

7月8日 日曜日 パリ

パリ郊外を歩いているデルフィーヌは電柱に「人間関係を回復しよう。悩める人は連絡を」という緑の張り紙を見つける。次いでパリ郊外のある中庭で、友だちのマニュエラ、ベアトリス、フランソワーズとテーブルを囲んでお茶してる場面である。そこでデルフィーヌの性格をめぐってベアトリスと激しい口論が起こる。ベアトリスが「一人ぼっちでいることを奇妙だと思っているの?」と尋ねるのに対して、デルフィーヌは「私はそれを奇妙なことと思ってないわ、でもグループ旅行をして切り抜けようとは思わないわ!」と答える。しかしベアトリスは「いいえ！行動して切り抜けるのよ!」として、「分かりなさい、本当だから！私もあなたのような、実際行

動せず、寂しかった時があった。辛かった...辛い！そんな風になりうることは理解できる、でも切り抜けなくちゃ。私たちは、友達として、あなたを助けるためにここにいるのだから」と言う。デルフィーヌは「私の場合を決め付けしないで。私は寂しくない。すべてうまくいっている...」と答えるが、ベアトリスは「でも膿^{うみ}を出すには物事を突き詰めなければならない」と主張する。苛立つデルフィーヌは「でもあなたは私のことを識らないわ！私のことを識らないわ！」と反論するが、ベアトリスは意見する追及を止めず「私はあなたのことを識らない！でもあなたのことは分かるわ」と言って譲らない。デルフィーヌは「でもあなたは私の何が分かるの？あなたはそこで私を見て、時々少し会うだけだわ...あなたは私のことを識らないわ！なんのことを話しているの？あなたはものごとの表面で判断してる...」と言い返すが、ベアトリスは「いいえ、すでに一緒に話したわ。あなたは十分行動しない」と批判を続ける。そしてデルフィーヌは「私たちはほんの少ししか話してない。その上いつも話しているのはあなただわ」と言うが、「ああそうね。意見を表明するのはなにか表明することを持っている人よ」とベアトリスは言募^{つひ}るのに対して、「いいえ私は沢山の表明すべきことを持っている」、「私は表明しない表明すべき沢山のことがあるわ」とデルフィーヌは言い返す。しかしベアトリスは激しく「表明しなさい！私たちはあなたが自分を表明することを望んでいるの！」と言い、さじで言葉を区切りながら「私たちはちゃんと聞くわ...ご免なさい、あなたは言うべき何を持っているの？」と言い放つ。デルフィーヌは「あなたは意地悪だわ」とやっとなと答えるが、ベアトリスは「私は意地悪ではないわ、あなたに良かれと思っているの、でも時々、実際に意地悪さの段階を通過する、なぜなら、時々、人をせかせせなければならないから...分からないけど、もしあなたの両親があなたを甘やかして育てたとしたら...」とまで言い出す。デルフィーヌはますます苛立って、困惑して「彼女おかしいわ！彼女意地悪だわ！なぜ彼女はそんなことを言うの？結局、率直に言って？」と言うのに対して、ベアトリスは「ええ、分かったわ、私はおかしいわ、私は意地悪だわ」と認めるが、デルフィーヌは苛立ったまま「私の両親が私をどのように育てたかですって？つまり...」と言うのに、ベアトリスは「成長するには反抗期も必要よ」と言う。デルフィーヌは「ちょっと待って！私は、すべてうまくいっているわ。ええ、今少し一人ぼっちよ、でも、私の意味しているのは、私は完全に一人ぼっちじゃない、完全に一人ぼっちの女の子じゃない。私の人生にも恋人はいるの！たとえ今彼に会えないとしても、それは私にとって非常にとても大切なことなの。であなたは何も言うことないでしょ、ほら！」とやっとなと言い返す。ベアトリスはそれを聞いて「一人ぼっちだと思ったの。恋人がいたの。ごめんなさい」と謝り、口論

は一応終了する。ここでの互いに自分の主張を曲げない激しい言い争いは、フランス人の自我の強さを証明するものである。

そこでマニュエラが「ジャン＝ピエールとは終わったんでしょ。彼との思い出に生きるか、新しい恋人を探るか、どうなの？じっと王子さまを待っててもだめよ」と意見する。そして「星占いで恋人を探してみる？」と提案して、「でもそれでもあなたなにか信じてる、もし信じてないとすれば...」と言うのに対して、デルフィーヌは「私は信じてるわ、信じてるわ、信じてるわ...私はそんなふうにならにおこること、(少し強調して)恋愛のことは信じてるわ...」と答える。マニュエラは「結局あなたは信じてないでしょ、私が意味しているのは、あなたはいかなる縁起担ぎもしないでしょ？あなたは偶然も信じないし、カードも信じないし星占いも信じないでしょ、何も？...」と決め付けるが、デルフィーヌは「私は個人的な縁起は信じてるわ。一つのことは信じている。私はトランプカードを、通りで見つける小さなトランプカードを信じることはありうるわ」と言い、ベアトリスの「あなたはしばしばそれを見つけるの？」という問いにこう答える。「私はそれを時々、その上少しも予想しない時に見つける。歩いているとカードを一枚見つける、そしてそれは毎回なにかを意味している。別の時、姉の家に行っているとまたスペードのクイーンを見つけたの。スペードのクイーンは、よくない」という話をする。そして次のような経験を語る、「それで、姉の家に行っていると、そう、一枚のカードに引きつけられたの...そしてその上そのカードは緑だったの！そしてとても奇妙なことは、友だちの霊媒師に出会ったことなの、彼は緑が今年の私の色になるだろうと私に言ったことなの。そしてとても奇妙なの、なぜならそれ以来私は、それに気づくからかもしれない、ほら、いつも緑の小さなものに出会うからなの、分かる！それで姉の家に行くために歩いている：私は何を見たと思う？緑の電柱に緑の小さなピラよ、そして私は、何てことでしょう、緑の服を着ていたの」。そこでマニュエラは「そんなら、ひょっとして、あなたが見つけるのは緑の恋人ね！」とからかい、ベアトリスは「いいえ、でもそれは希望の色だわ！」と言い、フランソワーズ「ああ、いい一年ね」と言う。ここで緑の色が、この映画において持つ意味が予告されている。

そして最後にベアトリスが「ほら、新聞をとって。それであなたは、山羊座ね」と言ってデルフィーヌの星占いを読み上げる。「◀型にはまることを望まず、自称魅力的な王子さまを待ちながら、あなたはいつも一人ぼっちです、そしてそのことがあなたを苦しめます」。デルフィーヌは小さな声で「そうね」と言い、ベアトリスは読み続ける、「◀なんてひどい巡り合わせでしょう！でも(強調して)あなたの特有の頑固さに対してはどうしたらいいでしょう」。それに対してデルフィーヌは

「でも私は頑固じゃないわ！私に対して頑固なのは人生のほうよ！本当に...本当に...」と答えるのが精一杯である。ここではパリジェンヌたちが、デカルトの国でありながら、意外と星占いや縁起かつぎなどの迷信的なことに強い関心を持っていることが分かる。

その後デルフィーヌは、その場を離れ物陰に隠れる。彼女がジャン＝ピエールと分かれたこと、2年間一人ぼっちであることが明かされる。探しにきたフランソワーズに「私の田舎に一緒に行きましょ、兄や姉や子供たちもいるわ。大勢いるわ。太陽も海もあるわ」、「シェルブールよ」と言われるが、デルフィーヌは泣きながら家族からアイルランドへ行こうと誘われたが、「そんなのは本当のヴァカンスじゃないわ」と訴える。ここでデルフィーヌが真に求めているのは、本当のヴァカンスと呼ぶに値するそれであることが分かる。

この場面でのフランス語で学ぶべき点は、「Tu trouves ça marrant d'être toute seule」のS+V+C+Aの構文の把握と「ça」が「d'être toute seule」を受けるとの理解であり、「on dirait que」（「～みたいだ」）の表現を学ぶことである。

7月18日 水曜日 シェルブール

結局、ヴァカンスの行き場を見出せないデルフィーヌは、仕方なくフランソワーズにくっついてシェルブールへとやって来る。そのシェルブールの港の近くで、フランソワーズがシェルブールの風景をデルフィーヌに説明していると、エドゥアールという一人の船乗りと出会う。彼は今晚夕食後、10時か11時に会えないかなと誘ってくる。フランソワーズは「ええ、いいわ」と答えるが、デルフィーヌは「いいえ、家族と会う約束を取り消すことはできるとは思わない」と断る。フランソワーズが「いいえ、会う約束を取り消せるわ」と言うのに対して、デルフィーヌは「いいえ、それはできないわ」「なぜなら、それは約束したことだから、そして義務があるから」と断り続ける。フランソワーズが「それはいつも調整できるわ」と誘いに肯定的に答えるので、エドゥアールは「君たちが夕食するなら、その後会えないかな？」と更に誘ってくる。それに対して、デルフィーヌは「だめだわ」と拒否する。フランソワーズの方は相変わらず「いいわ！」と答えるが、デルフィーヌは「行かなくちゃ、さようなら」と言って、立ち去ってしまう。二人残された形になったフランソワーズが「明日なら会えるわ」と言うと、エドゥアールは「明日は出発する」と答えるので、フランソワーズも仕方なく「そう、じゃ近いうちに」と言って遠ざかる。フランソワーズが「あなたはなぜ立ち去ったの？」と尋ねるのに対して、デルフィーヌは「分かるでしょ、私は用心深い」と答える。フランソワーズが「彼はあなたの気に入らなかった？」と問うのに、デルフィーヌは「ええ、でも、彼はちょっとナンパする男の様子してる」と警戒心を露わにする。前者が「そ

んなに注文が厳しすぎると、誰にも出会えないわよ、ええ！」と咎めるのに、デルフィーヌは「ええ、でも聴いて、明日出発する男よ、よく分からないけど、彼は私には変にみえた」と答える。フランソワーズが「よく分からないけど、私は、あなたの立場なら、いいわと言ったでしょう！」と言うのに対して「そうね、でも私とあなたは同じじゃないのよ、フランソワーズ」とデルフィーヌは答え、フランソワーズも「そうね、同じじゃないわね」と答えてこのシーンは終わる。ここでデルフィーヌが、男性に対して軽い女ではなく、頑固なほど身持ちの堅い女性であることが強調されている。

このシーンでは「*dragueur sur les bords*」を「ちょっとナンパする男」と訳するのが難しい。

その夕べ、フランソワーズの実家で、肉・卵・魚はほとんど食べないという「菜食主義者」のデルフィーヌの素顔が明らかにされる。中庭のテーブルにジェラルムが「ほら豚のわき腹肉だよ。ちょっと置く場所を作って...さあ、生焼け、レアがある、必要なものはすべてあるよ。各人取り分けて」と言うのに対して、デルフィーヌは「私は肉は食べないの」と言い放つ。ジェラルムが「そうなの？」と言い、デルフィーヌ「ええ」と答え、ブリジットが「肉が好きじゃないの？」と問うと、デルフィーヌは「ええ、それは好きじゃないの。でも重大なことじゃない、ええ、問題じゃないわ」と答える。ジェラルムは幾分がっかりして「そうなんだ」と言うので、デルフィーヌは「重大なことじゃない、いえいえ、それは重大なことじゃない！」と弁明する。ブリジットが「他のものを作って欲しい？」と尋ねると、デルフィーヌは「いえいえ、私にはタブレがあるわ、大丈夫」と答える。「タブレ」とは「小麦の引き割り粉にミント、トマトなどを混ぜ、オリーブ油とレモンで味付けしたレバノン料理」（小学館ロバール仏和大事典）である。そこでジェラルムQが「リリアヌ、彼女に卵料理を作ってあげて、ねえ！」と言うと、デルフィーヌは「私は、タブレの中に小さなトマトを入れたいわ、なぜならそれがあまりないから」と答える。そこで彼女に緑の林檎とトマトのコンポート皿が彼女に差し出され、彼女はトマトを一つ取る。ジェラルムLが「ほんの小さなのも欲しくないのかい？」と再度豚肉を勧めるが、デルフィーヌは「いえ、いえ、私は肉を食べないの」と頑なに拒否する。リリアヌはデルフィーヌの菜食主義を「ほら、トマトをひとつ取って。そのことを私たちに言うておくべきだったわ！」と少し非難すると、ジェラルムQも「そうだよ、他のものを作ることもできただろうに」と同調する。フランソワーズが「彼女は野菜のほうがより好きなのよ」とかばうが、リリアヌが「でも、それでも、卵は食べるんでしょ？」と問うと、デルフィーヌは「それもあまり食べないわ」と答える。ジェラルムQが「そう、でも君は肉を決して食べないの？」と少ししつこく問うと、デルフィ

ーヌは「ええ、決して」と断言するので、ジェラルールQは「ああそう」とがっかりする。ブリジットが「それで魚は?」と尋ねると、デルフィーヌは「いいえ、私は魚も、あまり食べない。他に何も無い時は、時々食べるけど...他の人の家にいる時は、時々、確かに少したんぱく質のものがいいわ、でも私は...」と譲らない。ジェラルールLが「それで身体のレベルで問題はないのかい?すべてうまくいっているのかい?」と尋ねると、デルフィーヌは「ええ」と答える。この場面での女主人公の自己主張の強さは、穏和で付和雷同的な性格の強い日本人には少し驚き、あきれられる程のもので、容易には納得できない性質のものとして映るだろう。他人の家にお邪魔していて、いくら自分が菜食主義者だからといって、出された料理を一口も食べないことを拒む頑なな態度は、フランス人の自我の強さを如実に表している。これはフランス人の心性の大きな特色のひとつであることを知る場面である。

さらに場面は続き、「菜食主義」は、基本的に「意識の問題」だと主張するデルフィーヌの哲学もしくは信念の吐露が続く。フランソワーズが「でも、デルフィーヌ、あなたは緑のものが好きなんでしょ?例えばサラダはそれを庭から引き抜くと、それは生きているわ、でもその後は?それは萎れて、それ故死んでしまうわ」と、野菜も食べるためには殺生することは同じだと主張すると、デルフィーヌは「そうね、でも私はサラダは同じものとは思わない。それを同じものとは思わない。私にとって、サラダはとても遠くにあるものなの、それは肉や動物より私からとても遠くにあるものなの。サラダはより友だちで、あっさりしていて、より...野菜は軽やかで、分からないけど、それは...」と言いかけると、リリアーヌが「血がない?」と問い、ブリジットが「鼓動する心臓がない?」と応じる。デルフィーヌは「でも...恐らく...恐らく私は事態を意識していない、でも今のところ、ええ、私が到達した、私のような段階では、多分私は間違っているかもしれないけど、...それは本能的な(無意識な)問題なの。私はそうやって食べてるし、そうやって栄養を取っているの」と説明する。するとジェラルールQが「ねえ、僕も若かった頃、肉屋へ行くと、そんな風な感情を持ったことがあった。今はスーパーマーケットで肉を買うから、もうそんな感情はもう持たないけど」と発言する。実際、筆者もパリに留学した時、考えごとをしながら歩いていて、縦に真っ二つに切断された豚が肉屋の店先に吊るされているのにおつかりそうになり少し驚いたことがある。それを受けてデルフィーヌは「それはそれが完全に事態の意識と無意識の問題であることを証明している、そしてそれが良いとは思わない、なぜならもし単純に肉を食べることができれば、なぜならもう自分のしていることを、家畜を殺すに到る手段をもう意識していないからからだわ、それこそ、間違いよ!あなたは肉

屋に行ったとき意識してたでしょ、血や事態の暴力を意識したでしょ」と言うと、ジェラルールQは「まさにそうだ」と応じ、デルフィーヌは「そこで、突然、あなたはそれ(意識)を失う」と主張する。ジェラルールQが「ちょっといい、僕が他のものを買うときは...」と言いかけるが、デルフィーヌは「あなたはそれを失う、でもそれを失うべきでない、正に」と断言する。そこでジェラルールQは「そうだね、でも...僕はまた僕のそれとは違う条件で生きている人々によって作られている生産物を買うけど、それらをまた躊躇いなく買う。もし僕がスーパーマーケットへ行きそしてなにかを買う度に意識の問題を持たなければならないとしたら...」と少し反論しようとする、デルフィーヌは「でも私は単純に、主に肉の話をしているの、それはここ、フランスでは無くてもとてもよく済ませられるものだから、なぜなら食べることのできる沢山の他のものがあるから、ね。それはまったく解決できる意識の問題だわ、単純にそれを食べない、他のものを食べる。そのうえ、純粋に経済的に...」と自論を述べると、リリアーヌが「それじゃ肉屋さんは、ねえ!」と茶々を入れる(笑い声)。ジェラルールLも「経済の観点からも、不都合が生じるよ」と反論する(笑い声)。しかしデルフィーヌは「それはとても経済的よ。肉は高くつくわ。毎日穀物を食べるのは安く済む。(彼女は手を交えて、活気づいて)。一般的な経済の観点から、草原にあるものを食べるより草原で牛の群れを飼育するほうがずっと高くつくことは確かよ!それは確かよ!」と意見を譲らない。ここでも自分の考えを正しいと思うと譲歩しないフランス人の性格が現れているが、日本人の主食が米だと言うことができるとすれば、フランス人の主食はパンではなく肉である。フランスは肉食の国であり、「肉食の思想」である。菜食主義が正しいことなのかどうかは安易に断定はできないだろうが、ただ「Meat is murder」(The Smith)という言葉があるように、肉食ばかりすると健康に良くないということは一定程度確かだと言えるかもしれない。

ここでは「se passer de」(「～なしですます」)の熟語表現の理解が肝要である。

7月19日 木曜日 シェルブール

シェルブールの別荘の中庭で、好奇心の強い少女ヴァネッサの質問攻めに会うデルフィーヌ。ヴァネッサにブランコ乗りに誘われたデルフィーヌは、「あまりしたくないの、わかるでしょ、私はブランコ遊びは好きじゃない、気持ちが悪くなるの」と言いながらヴァネッサのブランコ乗りの背を押してやりに来る。「それじゃ、小さい時決してブランコ乗りをしなかったの?」と聞くヴァネッサに、デルフィーヌは「えっと、言ったでしょ、それはすぐに私の胸がむかつかせたの」と答える。「あなたは激しい遊びがあまり好きじゃないのね!」と言うヴァネッサに、「原則的に激しくないわ、ブランコは」と

デルフィーヌが答えると、ヴァネッサは「あなたはとても物静かに見える！」と意見を述べる。続けて「ヨットは好き？」と尋ねられたデルフィーヌは「舟も気持ちが悪くなるのと」と答える。ここでデルフィーヌがあまり活動的でない内省的な性格の娘であることが示唆されている。次に庭のカシスを食べながら、ヴァネッサが「恋人はいるの？」と尋ねるのに対して、「ええ、恋人はいるわ」とデルフィーヌが答える。「それじゃ、なぜ彼は来なかったの？」とヴァネッサが聞くのに、「なぜなら彼は来ることはできない。彼は働いているの」とデルフィーヌは説明する。ヴァネッサは「それは馬鹿げてる、違う？」とヴァカンスを取らないで働くことを批判するが、デルフィーヌは「私にはなんでもないわ、でも...」と言う。彼の名前を聞かれた彼女は「ジャン＝ピエール」と教える。「あなたは彼としばしば会うの？」とヴァネッサに尋ねられたデルフィーヌは「ええ、でも彼はパリで働いてないの、それで彼とはしばしば会えない...でもそれでも彼は私の恋人なのよ」と強調する。「あなたはだぶん後に彼と一緒に暮らすんでしょ。もっと後で？」と聞くヴァネッサに、「ええ、いつか」と答えるデルフィーヌだが、「なぜそんな事を私に尋ねるの？心配なの？」と聞き返すと、「いいえ、質問してるの」とヴァネッサは答えるだけである。デルフィーヌは「私もまた、恋人はいるわ。いずれにせよ、いるわ、何人も恋人はいるの、私はそれを取り替えるの」と強がり言う。「ここに永く滞在するの？」「あなたたちが私を外に放り出すまで！」という会話を挟んで、ヴァネッサの「それであなたは彼に電話するんでしょ？」という問いに、デルフィーヌは「誰に？」と問い返し、前者が「えっと、あなたの恋人に」と言うのに、後者は「多分ね...いずれにせよ、私には他にも何人もいるの」と繰り返して言う。するとヴァネッサは「あなたはそれをシャツのように取り替えるんでしょ！あなたはシャツのように男を取り替える！彼らは良い、でも後で飽いてしまう、でしょ！」と言うので、デルフィーヌは「なぜそんなこと尋ねるの？あなたにそれを尋ねさせたのは誰なの？」「ああ！あなたはとても好奇心が強いわ！」とヴァネッサの好奇心の強さに呆れる。ヴァネッサはそれが生まれつきだと肯定し、「それであなたは彼と計画があるの？」と尋ねるのに対して、デルフィーヌは「すぐには計画はないわ、そんな風にはならないわ」と答える。ここでデルフィーヌが元彼のジャン＝ピエールとはほとんど縁が切れた状態であり、本当に孤独であることが明示されている。

ここには語学的に難解な点はないが、「C'est qui qui t'a demandé ça?」という強調構文の疑問形が珍しく思われる。

7月20日 金曜日 シェルブール

中庭のテーブルを囲んで、「気難しい」デルフィーヌの「真意」を探ろうとするブリジット、二人のジェラ

ル、リリアンヌの「詰問」の場面。

ブリジットが「明日、海に行ってヨット乗りしない？」と誘うと、デルフィーヌは「ヨット？私は海には行きたいわ、でもヨット乗りはできない、なぜなら舟に乗ると気持ち悪くなるから」と答える。そこでブリジットは「じゃ、あなたは魚座じゃないわね！」と言うと、デルフィーヌは「ええ、私は山羊座よ」と教える。「山羊座なの...」とつぶやくブリジットにデルフィーヌは「そう、あなたは星座が解るの？」と尋ねる。ブリジットは「ええ、少しだけ。少し占星術をやるの」と答える。「それは何を意味しているの」とデルフィーヌが尋ねると、ブリジットは「山羊座は、えっと、あなたも知るように、それは山をよじ登り、できるだけ高く行く小さな山羊の象徴よ。でも一般に、それは一人でそこに行くの。それは、少しあなたのことでしょ！そう思わない？」と意見を述べる。デルフィーヌは「ええ、私のことかもしれない」と認める。ここでも星座占いによって、主人公の矜持の高さとそれゆえの孤独が確認されている。するとジェラルムLが「その通りだ、君とは知り合って少しだけど、なにか提案する度に、「いいえ、それは私は興味ないわ、いいえ、本当に...」と言うように見える」と少し批判気味に発言する。デルフィーヌは「おお！私はそんなに気難しくないわ！莫迦なこと言わないで！」と反論するが、ジェラルムQが「じゃ、君は何が好きなのかい？」と尋ねると、「何ですって、何が好きかですって？私は気難しくしてないわ！私は今まで、超親切よ！」とデルフィーヌは懸命に言い返す。さらに非難されそうになると、「私は気難しくしてないわ：買い物もしたし、散歩もした、ええ私は感じよくしたわ、くそっ！」と反抗的に云う。ジェラルムQが「君は皿洗いをした」という言葉に、「私は皿洗いをした！」とデルフィーヌが応じると、ジェラルムQは「しかし君はいつもいいよと言うとは限らない...」と答めるのに、デルフィーヌ「あなたたちは私に何を非難しようとしているの？」と言い返す。それに対してブリジットが「みんなあなたを楽しませたいと、あなたがここに居る間最大限あなたをもてなしたいと思っているのでしょうか？」と説明する。デルフィーヌは「でも私は大丈夫、とても気分はいいわ！」と強がって見せる。ジェラルムLが「何が本当に君の興味を引くのだろう？君はこれらの日々何を本当に強くやりたいと思っているのかな？」と尋ねると、デルフィーヌは「えっと、散歩すること、それで十分よ」と答える。ジェラルムLは「それだけで君には十分なの！」と言い、リリアンヌは「それじゃ、植物ね！植物...」と言うのに、デルフィーヌは「私は植物なの？」と言い返すばかりである。この場面でも主人公の孤独（立）が強く描き出されている。

7月21日 土曜日 シェルブール

近くの森の中を一人であどなく散歩するデルフィーヌ。茫々と吹く風の強さと海鳴りの音に思わず涙を流し

てしまう彼女の姿に孤独と寂しさが^{にじ}滲む。

7月22日 日曜日 シェルブール

ヴァカンスを長く取れず恋人と一緒に一足先にパリに帰ることになったフランソワーズに「一緒に帰りたい」と言うデルフィーヌ。それを家族に告げるフランソワーズ。「私はここに残りたくないわ。あなたは私を連れて行くべきよ」と言うデルフィーヌに、フランソワーズは「でもどうしたの？ここは良くないの？」と尋ねるが、「いいえ、いいわ、とてもいいわ、でも...」と答えるデルフィーヌ。フランソワーズの「彼らはあなたに十分親切じゃないの？」という問いに、デルフィーヌは「彼らはとても親切よ...聴いて、率直に言って、解ると思うけど、私はこんな風に、一人ぼっちでここに居残ることはできないわ！」と答える。フランソワーズは彼女の言うことに理解を示し、「彼らになんとか言って切り抜けることができるわ。おお、彼らは頭がいいし、解ってくれるでしょう！」と述べる。デルフィーヌは「とても気詰まりなの」と言って家の中に入る。フランソワーズは中庭のテーブルにいる家族のもとに行き、ジェラルドQの「君は私たちにサヨナラを言いに来たのかい？」と問う質問に、「ええそうなの、でも知らせがあるの!」、「えっと、デルフィーヌは帰るの」と告げる。驚いて「ああそうなの？」と言うブリジットや「彼女怒ってるの？」聞くリリアヌにフランソワーズは「ああ違う違う違う！彼女が怒っているということは全然ないの、でも彼女は三人で帰るほうを望んでいるから」と説明する。「僕はそれにあまり驚かないな」と言うジェラルドQに対して、リリアヌは「いいえ、私はそれを残念に思う。彼女は感じ良かった」と言う。フランソワーズは「そうじゃないの、でも理解できると思うけど、私たちのようには、えん、私が意味してるのは、人は同じじゃないということ、ね!」と弁解する。ユーグが「いや、でも彼女はパリに居たかったんだ」と言い、ジェラルドとリリアヌは「ええ、それじゃ、分かった。いいよ」と認める。そこへヴァネッサがやって来て、「デルフィーヌは行ってしまうの？」と尋ね、フランソワーズは「ええ、彼女は行ってしまふの」と答える。「でもなぜ行ってしまふの」と聞くヴァネッサに、フランソワーズは「えっと、分かるでしょ、私たちと一緒に帰ったほうがいいのよ、分かるでしょ...」となんとか言い訳する。ヴァネッサは「でも彼女はパリで一人ぼっちになるんでしょう？」と尋ねるのに、フランソワーズは「おお、私は知らないわ、ねえ!」と言うばかりである。シェルブールは、デルフィーヌにとって周りの親切な人々にもかかわらずあまり居心地のよい所ではなく、理想とするヴァカンスとは違っていたのである。

7月23日 月曜日 パリ

パリに戻ったデルフィーヌは一人パリの中を散歩するが、途中で少しマッチョな男に後をつけられナンパされかかるが、振り切ってアパートマンに帰る。そこで山に

籠もっている元彼のジャン＝ピエールに電話をかけ、シェルブールでのヴァカンスは途中で切り上げてパリに戻ったこと、そして山に会いに行ってもいいかを尋ねる。

7月25日 水曜日 ラ・プラーニュ

山にやって来たデルフィーヌだったが、ジャン＝ピエールは谷に下りていて会えず、仕方なく山を散歩することにする。まだ雪溪の残る冷たい山道を一人で歩くこの場面はやはり主人公の孤独を表している。また気分の減ってきたデルフィーヌは荷物を預けていたところに戻ってやはりパリに戻ることにする。

7月26日 木曜日 パリ

一日でラ・プラーニュから戻ったデルフィーヌは、フランソワーズが働く美容室を訪ねる。彼女を慰める(いや慰めようのない)フランソワーズとのやり取り。挨拶を交わした後、フランソワーズが「あなたもう山から戻ってきたの？」と問うのに対して、「そうなの。一日だけ留まったの。朝出発して、その夜に戻った」とデルフィーヌは答える。フランソワーズは呆れて「その夜に！あなた少し頭おかしいわ!」と言うが、デルフィーヌは「いいえ、でも私には我慢できない。ラ・プラーニュは識ってるわ。あそこにたった一人で留まることはとても辛い。私はもう耐えられないわ!」と答える。フランソワーズが「これからどうするの？」と尋ねるが、デルフィーヌは「えっと...」と口ごもるだけである。フランソワーズが「あなた少しお金持ってるんでしょ、再び出発できる、違う？」と言うが、デルフィーヌは「でもそれが問題なの、一人ぼっちで出発することなの、それがひどく悩ませるの!」と嘆く。フランソワーズは「結局、それでも、あなたのヴァカンスの終わりまでパリにとどまるつもりじゃないんでしょ?」と聞くが、デルフィーヌは「うーむ...」と言うだけである。フランソワーズは「分かるでしょ、いつも誰か男の子と出会うのはもっとも予期しない時だわ、ねえ!」と諭すが、デルフィーヌが「まあ、その通りね、私は何も予期してないし、それで私が誰か男の子と出会えることができるのかどうかとても知りたいわ」と自信のないことを言うのに、フランソワーズは「確かめてみなくちゃ!」と元気づける。デルフィーヌは「いえ...いえ、私はあなたに莫迦なことを言ったわ。自分がしたいことが全然分からない。私は本当に自分が変になりそうに感じる」と言って泣き始める。フランソワーズはそれを見て「おお、まあ!ダメ、ダメ、ダメ!いえ、いえ、いえ!あなたはとてうまく留まれるわ」と慰めるが、デルフィーヌは「いいえ、ほっといて...どこに留まるの?パリに留まるの、一人ぼっちで?知らない...」と泣きながら答える。パリジェンヌにとってヴァカンスをうまく過ごせないことがこんなに辛いことだというのは、そういう風習のない我々日本人にはあまり実感できない性質のものである。

語学的には、「Je me sens vraiment ailleurs」(直訳

すれば「私は本当に自分が他のところにいると感じる」を「変になりそうに感じる」と訳するのが少し難しい。

7月27日 木曜日 パリ

ヴァカンスの当てもたたず、セーヌ河沿いを散策したデルフィーヌはサン-ジェルマンの裏手を歩いていると、旧知のイレヌとカフェで偶然出会う。挨拶を交わした後、イレヌが「元気？」と尋ねると、デルフィーヌは「ええ、なんとか元気よ。ここであなたに会うなんておもしろいわ。奇妙だわ...ここで何してるの？」と問い返す。イレヌが「えっと、聴いて、買い物をしに行っていた！角のところを通りかかって、休んでいたの。それであなたは何してるの？」と言うのに、デルフィーヌは「私は散歩してるの。家に帰るところだった。相変わらずあそこのサン-ジェルマンに住んでいる。私は、ヴァカンスなの、でもそこで待機中なの。もっとよいことを見つけることを期待しながら...」と答える。続けて「びっくりしたわ...！それであなたはどうなってるの？」と彼女が尋ねると、イレヌは「ええ、聴いて、私は大きな一歩を踏み出したの。私は結婚したの。結婚した」と答える。デルフィーヌが「また！」と驚くと、イレヌは「ええ、もう一度。でも今度は、真剣よ。なぜなら小さな赤ちゃんがいるの」と説明する。デルフィーヌが「何時産んだの？」と聞くと「17ヶ月になる」と答える。デルフィーヌが「可愛いね？」と言うと、イレヌは「ええ、とても可愛い」と言う。デルフィーヌが「あなたは満足しているの？」と尋ねると、イレヌは「ええ、ええ。ええ、ええ。そして違う... (辛い) 時もある...今までとても、とても難しかった。とても辛かった...辛い。あなたには (解らない) ...結局そのことをこんなふうに語るのはあまりに難しい、あまりに長すぎる、でも...それであなたはいいことなにかしてる？」と語る。デルフィーヌが「私...私は少しヴァカンスに行った」と答えると、イレヌは「でもあなた仕事してないの？」と問うので、デルフィーヌは「いえ、いえ、仕事してる、働いてるわ、でも当然私はヴァカンスなの。そして私には使える2週間があるの、でも本当は...」と答える。「なぜあなたは出発しないの？」と問うイレヌに、デルフィーヌは「でもまさに、問題なのは、私は出発したことなの。私は出発して、そして戻った。また出発して、そして戻った...そして自分が空しく感ずるなぜなら、今、パリに莫迦のように居るから、分かるでしょ。不吉な天気だしだから本当にすぐに再び出発したい。」と嘆く。イレヌが「すぐに少し不吉になる、でも晴れになるでしょう！」と言うと、デルフィーヌは「でも私はどうでもいい、なぜならあそこの、サン-ジェルマン大通りの私の部屋を識ってるでしょ、天気の良い時は、そこは暑くなる！」と答える。するとイレヌが「私に考えがあるわ...考えがある！」と言い出す。「それは何？」とデル

フィーヌが尋ねると、イレヌは「ビアリッツにアパートマンを持っている義理の兄がいる、それで私はそれをあなたに貸すわ！聴いて、彼は毎年それを私に貸してくれているんだけど、私はビアリッツ、それにあまり関心がないの。私には便利でないし！なぜなら私はパリの近くに留まらなければならない。夫とドーヴィルに行く、それだけのこと」と言ってくれる。ビアリッツはスペイン国境近くの大西洋岸の有名な保養地である。デルフィーヌは「それはとても親切だわ！それは凄いわ！」ととても喜ぶ。「そこは超綺麗よ。結局...それにとっても沢山人がくるの、分からないけど！」とイレヌが付け加える。

この場面では、「*Je n'en reviens pas*」(「びっくりした、驚いた」)の表現が少し難解である。

8月2日 水曜日 ビアリッツ

こうしてイレヌの親切でビアリッツにやって来たデルフィーヌだったが、場面は彼女が相変わらず一人ぼっちで海水浴をしたり、甲羅干しをする無為な姿がかなり長い間映し出される。ここでも主人公の変わらない孤独の状況が強調されている。

8月2日 木曜日 ビアリッツ

まず一人で海岸を散歩するデルフィーヌが描かれる。彼女は岩場でまたハートのジャックのトランプカードを見つける。それは何を意味しているのだろうか。良い男の子と出会えることを予兆しているのだろうか？その帰り道、海岸の階段の上の石棚に坐った4人の夫人たちが、ジュール・ヴェルヌの『緑の光線』のことを話題にしているに出くわし、デルフィーヌはそれを階段の下で聞く。夫人1が「あなたそれを読みました、マダム？」と聞くと、夫人4が「ええ、マダム、子供の頃に。私の記憶はとても不明確です。あなたは、今、それを読んでいる最中ですか？」と言う。夫人1は「読み終わりました。ああええ、私は読み終わりました、そして実際に、あまりジュール・ヴェルヌを好きでない私も、この『緑の光線』はかなり尋常でないものだと思います。なぜならそれは愛の物語だから、ロマネスクな物語だから、完全に...登場人物たちがいるから」と言うと、夫人2が「...探している」と、夫人4が「...尋常でないことを」と言葉^{つな}を繋いで、夫人1が「そう、何かを探している」と言う。夫人2が「そもそも、あなたは緑の光線を見ましたか？」と尋ねると、夫人4は「ええ、3度もそれを見ました。最初は、多分8歳か9歳だった。それはラ・ボールでのことでした。ラ・ボールをご存知？」と言い、夫人1と夫人2が「いいえ」と答えると、夫人4は話を続ける。「そう、とても、とても美しい、とても長い、7キロメートルの浜辺があります、そして私は偶然父と一緒にいました、ちょうどその時彼は私にジュール・ヴェルヌのことを話してくれていました。そしてとてもよく晴れた日のことでした、空気はとても乾燥していて、雲はありませんでした、すると彼が私に言ったのです：*«*

私たちは幸運に恵まれるかもしれない」。そしてその時、私はそれを見たのです。しかしそれは、太陽の球体が水平線に隠れる時の、ほんの一瞬にしかすぎませんでした。その時、最後の段階で、水平線にくっきり浮き出るサーベルの刃のような一種の明るい緑の光のようなものがありました、それは極めて綺麗だった、でもまったく短かった」。夫人2が「それを見るのは今日ではないわね、なぜなら空を見て、完全に霽が^{もや}かかっている、それに...」と言うと、夫人4が「ああええ、とても霽がかかっているし、とても曇っている。私たちは幸運はないでしょう」と応じる。夫人2は「ジュール・ヴェルヌが何を語っているか知ってますか？ジュール・ヴェルヌは、人は緑の光線を見ると、自分自身の感情と他の人の感情を読むことができると語っている」と説明する。夫人4が「本当？それは不思議なことだわ。もしそのとおりなら、それじゃ、緑の光線を見ると超能力になることができるわね！」と言うと、夫人2は「それがその女主人公に起こったことです」と答える。それを受けて夫人3が「彼女は決して緑の光線は見ないけれど、最後に自分の感情と彼女が会った青年のそれをとても良く読むことができるようになる」と付け加えて言う。

それを横で聞いていた教授に、夫人1が「それであなた、あなたは緑の光線について何もおっしゃいませんね。あなたはこの自然の現象をご存知ですか？」と尋ねると、その紳士は立ち上がり海に向かって女性たちの前に立ち、英語なまりのフランス語で次のように解説する。「おおはい、とてもよく。私はそれをとてもよく識^しっている。そして何度も、多分人生で5回緑の光線を見ました。それはかなり珍しいものです。緑の光線を全然見ることのできない夏があります、なぜなら大気^{たいき}の条件が好都合ではないからです。例えば今日それを見ることができません、あまりに霽がある。あまりに雲がある。妻が言ったように、大気が極めて澄んでいなければなりません。そしてこの現象の理由は、回折...あるいは屈折。屈折。あるいは大気中の屈折です。詳しく説明しましょうか？」の言葉に、夫人2が「よろしければ」、夫人1が「ええ、ええ」というので、教授は解説を続ける。「それで、あそこに太陽が見えますね。太陽は正確にはあなたがたが見るところにないのです。実際には、それは少しより下にあります、なぜなら太陽の光線は大気中で曲がるからです、そして太陽が水平線に近づけば近づくほど、大気中の回折は強くなります。そして太陽が水平線に触れるとみえる時、その時、実際には、それは既に水平線の後ろにあります。その時日輪はほんの少し上がっているようにみえる、半度です。それが、緑の光線の第一の理由です。しかし第二の理由、それはまたプリズムの中のように、色彩の分散があるからです」。そこで夫人1が「分解ね」と言う。教授は続けて「光がプリズムを横切ると、スペクトルがある、そして最も曲がる、あるいは曲げら

れる色は...」と言いかけると、夫人1が「ああ！...」と色を言おうとする。それを抑えて教授が「青です」と云うと、夫人1は「私は緑と言おうとするところだった」と応じる。教授は「いいえ、緑は青の近くにあるのですよ」と説明し、続けて「赤、黄、緑と青そして紫があります。そして青と紫は、とても弱い。とてもよく観察できるのは、黄色と緑色です。それで、太陽が沈む時、円盤は少し上げられます、しかし最も...青色、緑色は赤色より上げられます。それで円盤が水平線の下に消える時、見える最後の光線、それは緑です」と解説を終える。夫人2が「緑なのね！」と言い、夫人4が「驚異の緑」と続け、夫人2が「あなたは私に、本の中の、アリストビュラス・ウルシクロスという名の学者のことを考えさせる」と言う。夫人4が「おお、なんて難しい名前！」と云うと、教授は「いいえ、私はそれを(=『緑の光線』)読んでいません」と答える。アリストビュラス・ウルシクロスは、ジュール・ヴェルヌの小説『緑の光線』の中に登場する、緑の光線を探し求める主人公ミス・キャンベルの邪魔ばかりをする、ドジで間抜けで不恰好な、術学的な学者のことである。

こうしてこれらの会話を階段の下で聞いていたデルフィーヌは、奇跡の緑の光線の存在とその内容を初めて知ることになった。そして映画の最後の場面で、この緑の光線が彼女に救いをもたらすことになる。

8月3日 金曜日 ビアリッツ

相変わらず一人ぼっちでビアリッツの浜辺に手持ちぶたさに寝ころんでいるデルフィーヌだが、偶然隣りに場所をとったスウェーデン娘レナと知り合い会話を交わすことになる。海から上がったレナのバスタオルに掛かる自分の荷物をどけながら、デルフィーヌが「ごめんなさい」と言うと、レナは「いえ、いえ、大丈夫。そのまま、そのまま！かまわないわ」と告げる。彼女は自分のタオルの上にくるまる。赤いリボンをしたブロンド娘である。彼女は頭に小さな巻き髪を載せた金髪をしている。彼女はタオルをとり、体を拭きながら、「気持ちいいわ！あなたはまだ泳いでないの？」と話しかけてくる。デルフィーヌが「ええ、ええ、でも行くところよ。少し体を焼いているの」と答えると、レナは「もう、よく焼けてるわ！」と云う。デルフィーヌが「そう！」と答え、レナが「そうよ」と云う。デルフィーヌが「とても焼けているのはあなたのほうよ」と言うと、レナは「そう！私はそう思わない。まだ本当に体を焼くことに至ることができてない、やはり！」と述べる。デルフィーヌが「それでも悪くないわ、それでも。あなたはここにきて長いの？」と尋ねると、レナは「いいえ、一昨日おとといやっおとといと着いた」と答える。「一昨日？」と言うデルフィーヌの言葉を受けて、レナが「ああそうなの！でもあなたは、既に、この浜場はよく識^しってるの？」と聞くと、デルフィーヌは「えっと、ここにきて数日になるわ」と答える。

互いにヴァカンス中であることを述べ合った後、デルフィーヌが「あなたはドイツ人？」と聞くと、レナは「いえ、いえ、いえ。当ててみて、当ててみて...私はどこから来たのでしょうか？」と問題を出す。デルフィーヌが言いよどんでいると、レナは「私は「*tu*」で話すなぜなら、御免なさい、私はあまり上手にフランス語が話せない、たくさん間違いをする」と謝る。デルフィーヌが「いいえ、とても上手だわ。私はとてもよく理解できる。分からないけど、あなたはオランダ人？」と聞くと、レナは「いいえ、まだもう少し上」と答える。「ノールウェイ人？」と問うデルフィーヌの言葉と同時に、レナは「いいえ、そうじゃないわ」と言う。「スウェーデン人」と尋ねるデルフィーヌに、レナは「そう、その通り。それであなたは、あんたはフランス人？」と聞き返す。デルフィーヌが「そうよ」と答えると、レナは「ああ、とてもいいわね！きれいな国ね、フランスは！でも残念なことすべてを見てまわる時間があるかどうか分からない、なぜなら、こんなふうに、一年に一度の旅行だし、一年に一度のヴァカンスだし...」と嘆く。デルフィーヌが「あなたは、国を、フランスの国を一周するの？」と尋ねると、レナは「いえ、いえ、いえ、なぜなら私はここに来たの、飛行機で来た、その後スペインに出発する」と答える。デルフィーヌが「ああ、分かったわ。でもあなたは一人ぼっちで旅するの？」と尋ねると、レナは「ああそうよ！大好きなの！おやまあ！私は一人で旅するのがとても好きなの、なぜならたくさんの仕掛けを発見できるから、そして新しい男たちと出会うことができる、それだけのこと。それであんたは、ここで、旅してるの、一人なの？」と問い返す。

ここでは一人で自由気ままに旅する開放的なスウェーデン娘レナを対置して、デルフィーヌの閉鎖的・内向的性格が浮き出されている。この場面でレナを少し軽薄で尻軽な娘として登場させていることについて、ロメールは次のような面白いことを述べている。「『緑の光線』や『パリのランデヴー』のスウェーデン女性が登場するのは（本当はフィンランド人が演じていたりするのですが）、悪人というのではないのですが、役柄の上で悪口をいわれるような人物を南国系の出身にすると、それが役柄の問題だといっても、つい第三世界的なものに対する偏見ととられがちで、ことと次第によっては人種的な偏見などといわれかねないのです。ところが、ここヨーロッパなら、北欧の女性がちょっとからかわれても、まったく問題は起こらない（笑）、こうした理由から、やや否定的に描かれたスウェーデンの女性が私の映画に登場することになるのです」（蓮実重彦『映画狂人のあの人に会いたい』河出書房新社、2002、p.216）。

その後海で泳いで、いい男を物色しながらレナが恋人などうんざりだ、なぜなら嫉妬深いし、一人でいていらない男を探すほうを好むと言うのに対して、デルフ

イーヌはロマンチックな出会いがしたいことなどを述べあった後、二人はカフェテラスで恋愛観・男性観を語り合う。レナは「どうして分かるの、私は分からないけど、誰か、例えば、男が、いい男が通り過ぎるのを見る時、どうしてあなたはそれがあなたにとってよいと分かるの？彼があなたに近づいてきて、話し始める時、どうして好みのタイプだと感じるの？あなたは彼が好きか好きでないかどうして感じるの？もしあなたが自分自身で見ないならば、どうして、多分、彼があなたの気に入ると分かるの？」と言う。確かに、どのような機微で人は好き・嫌いの気持ちを抱くのであろうか？これは恋愛の永遠のテーマであるだろう。これに対して、デルフィーヌは「私は見ている、信じて。たいへん見ている。私は男たちをたいへん見る人なの。でも残りのことは、すべて、私には、ぼやけている。」と答える。レナは単語を聞き違えて「すべてが間違っているの？」と言うので、デルフィーヌは「すべてがぼやけている」と言い直す。レナが「なぜぼやけているの？」と問うので、デルフィーヌは「分からないわ。なぜなら私は人生においてとてもきばきと事態に対応する人なの。私は機能的ではない。私は男の人たちを見ている。でも私は誰かを見つけるためにあるいは何かを見つけるために決然としたことを決してしないと答える。レナが「でもあなたは男たちがあなたのもとへやって来るのを待っているんでしょ？」と尋ねると、デルフィーヌは「いえ、いえ、いえ、言ったでしょ。それはとてもぼやけているの、分からないけど」と自信なげに言う。するとレナが「タイプの男はひとりだけでやって来ないわ！なにかしなくちゃ」と意見を述べると、デルフィーヌは「私には、そうしたことすべてが曖昧なの。それはある会話ね。あなたは言う：「何かしなければならぬ」と。いずれにせよ、私は既にそう言われたわ。パリの友達たちが私にそれをすでに言った：何かしなければならぬ...ああ、そんなことすべて、冗談だわ！」と嘆く。するとレナが「あなた探した？でも私も最終的には探さなければならぬと思っていない、分かるでしょ。感じなければならぬ。あなた感じる？男の人と話しする？」と聞く。デルフィーヌが「ええ」と答えると、レナが「男の子にしる女の子にしる、彼らがどんな人なのか感じる？」とさらに尋ねる。デルフィーヌは「ええ、私はそれを感じる、それに...男の人にとっても心開いているわ。私はそれを感じる。私は自由な精神の持ち主よ、私は聴いている、心開いている」と訴える。レナが「でもあなたは時々失望するの？」と聞くと、デルフィーヌは「分からないわ、そうね。そうでありそしてそうでない。そう、もし特別なことが何も起こらなければ、私は決して...私は男の人たちの言うことをたいへん聴く、彼らが存在するのを見る、でも...」と答える。レナが「私は男たちを信用しない」と言うと、デルフィーヌは「人を信用しないの？」と聞く。するとレナは「私は男と遊ぶだけ」

と答える。デルフィーヌが「つまり、あなたは何するの?」と尋ねると、レナは「つまりきちんとした男、いい男を見つけるには、あなたはすぐにあなた自身の心を見せないようにしなければならない、分かるでしょ」と言う。デルフィーヌが「それじゃ、あなたはあなたの何を見せるの?」と聞くと、レナは「私は人生を生きている、楽しんでる、分かるでしょ。私は他の人の反応を見る、その後で結論を出す。これは良いのか、悪いのか?なぜならトランプのカードゲームのようなもので、分かるでしょ、あなたは手の中に持っているものをすぐに見せてはいけないわ」と恋の駆け引きをすることを教える。ここで両者の恋愛観の相違がはっきり示される。それに対してデルフィーヌは「私は手には何もない」と認める。レナが「ああそうね、きっと、あなたは何か持ってるわ、聴いて!」と云うが、デルフィーヌは「私は手には何もない」といって泣き始める。それを見てレナは「でも、デルフィーヌ!それでも、そんなに悲しいことではない、聴いて!でもどうしたの?なぜ泣くの...聴いて、忘れて...あなたの心配ごとを忘れて」と慰めるが、デルフィーヌは「でも私は心配ごとを忘れてる。そのことを考えていなかった。人は話す...なにかを見せることを話す、私にはなんのことか分からない!私は何も持っていない。もし私に見せるべきものがあれば、男たちはすぐにそれを見るでしょうに!ほら、それだけのことよ!」と言ってむせび泣く。レナが「何を?男たちが何を?ほって置きなさい、聴いて、だめよ!そんな風に考えないで!...しなくちゃ」と忠告するが、デルフィーヌは「私はあなたと同じじゃないの、よく分かるでしょ。私はあなたのような娘ではない。私は違う...私にとって物事ははっきりしない。私はあなたのように普通じゃない!私は...私にとって、もし見せるべきなにかがあれば、与えるべきなにかがあれば、男たちはそれを見たことでしょうに。もし私が見捨てられるとしたら、それは当然よ。それは確かに...私が悪いのよ。それでも私は努力している、男たちの言うことを聴こうとそしてなどなど、そして彼らに話しかけようと試みている。いいえ、私は心を開いている。これ以上開くことができるとは思わない。私は聴いている、起こることを見ている。そして...男たちが私のほうにやって来ないのは、そんな風だから、私が何にも値しないからだわ、そして...」と恋愛において完全に自信を失っている心情を吐露する。レナは「聞いて、デルフィーヌ!心配ごとを忘れて!すべてを忘れて、今晚、楽しみましょう」と言うばかりである。

ここでは « si...c'est que » (「...なのは...だからだ」) という理由・説明の主節を導く表現が誤りやすい構文である。

そこにレストランに沿って、左のテーブルに二人の若者がいる。それを見たレナは「おお、ほら、ほら、獲物があるわ!」と言う。彼女たちに目をつけた二人の若者、

ジョエルとピエロは、彼女たちのテーブルにやって来る。そこでジョエルとレナは軽佻浮薄な、埒もない会話をして戯れる。その戯言をじっと我慢して聞いていたデルフィーヌであったが、遂に耐え切れなくなって席を蹴って逃げ出す。アパートマンにまい戻ったデルフィーヌは、ビアリッツにいることにも愛想を尽かし、電話の交換にビアリッツの駅の電話番号を聞く。

8月4日 土曜日 サン-ジャンド リッツ

こうしてパリに帰るためにビアリッツの駅に駆け込んできたデルフィーヌであったが、それは午後3時33分であったため、パリ行きの列車は14時46分に発車してしまっており、夜行列車に乗ることにして、駅の構内の椅子に坐って本(ここでデルフィーヌが読んでいるのはドフトエフスキーの『白痴』であるが、それはこの小説の主人公ムイシュキン公爵の純真無垢の性格をデルフィーヌのそれと少しでも照応していることを暗示しているであろう)を読み始める。そこへ先ほどの不良の二人とはまったく異なる、ハンサムで真面目そうな青年ジャックが駅の構内に入って来て、彼女の近くの椅子に腰掛け、デルフィーヌのことをじっと見つめる。デルフィーヌはそれに気づき何度か視線のやり取りをした後、微笑み返す。彼は彼女の隣に坐りにやって来て、本のことや互いの職業のことを話す。ジャックは家具の見習い職人で、これから2日の休暇を取って、小さな美しい漁港サン-ジャンド リッツへ行くという。デルフィーヌはヴァカンスが台無しになったことを述べ、これまでの頑なな態度とは違って「そこに連れてって?」と言う。ジャックは「勿論、いいとも」と答える。この場面はこうしてやっとデルフィーヌは自分にふさわしい男と出会うことができたことを暗示している。

サン-ジャンド リュズの海岸を散歩した後、カフェのテラスでデルフィーヌはジャックに自分の孤独とその心情を訴える。「男は信用できない。だから恋人ができないのね。その気で言い寄ってくる男はたくさんいる。寝るのが目的よ。そんなの全部断るわ」と言うと、ジャックが「君は追わないの?」と聞いてくるのに、「ええ、でもなぜかあなたは別よ。なぜか分からないけど、そうしてみたいの」と答える。ジャックが「君は男に一度も恋をしたことないの?いや、君が男はみんな恋すると語るから、ええいや...」と言うと、デルフィーヌは「ああ、私は彼らがみんな恋してるとは決して言っていないわ!」、「反対に、全然ないわ。彼らは私に恋しない。彼らはある日私を追いかける、それに、ええ、私はそれが必ずしも本当の恋ではないことをとてもよく知っている、なぜなら...男は私から何を得たいと望んでいるかとてもよく知っている、そしてそれが取るに足らない時を知っている。私は男が私に視線を注いでいる時を知っている、それが取るに足らない時を、彼が上辺だけのことを見た時をそして彼が私に身を委ねることを望んでいる時を

知っている。私は、そう言ってよければ、それは私にとってくだらないと思う；まれだわ、とても寛大な男の視線は、分かるでしょ、それに私もまた彼のほうに近づきそして彼に身を委ねたいと思う...ええ、私は恋をしたことがある、でもしたことがある、ね...人生で三度恋をした。三度。でもあなたは、今恋をしてないの？」と述べる。ジャックが「いいえ、でも僕は恋をしたいと願っている。見つかるよ」言う、デルフィーヌは「ふむ！」と言い、ジャックが「何が？」と応える。デルフィーヌが「何でもない...私は莫迦なの、ねえ？」と言うと、ジャックが「僕はそう思わない」と言うのに、デルフィーヌは「私は、そう思う。私が男の子に出会わなくなるととても長くなる。同時に、そう望んだのは私のほうなの。私は本当にそれにふさわしい人がいない限りは独りでいようと決めた...そう言ってよければ、独りの時、一度、こんなふうに、右から左へ、ある人と親しくなる、感ずる...そういう時は、後でもっとよく独りだと感じると私は思う。分かる、家に夜帰る時、一度男と寝たことがある、それだけのこと、彼はどうだっていいそして私もまたどうだっていい、誰もそこに重要さを見出さない、分かるでしょ。私はそれを...孤独を引き受けるよりもっと恐ろしいことだと思う。それがそんなふうになる、それが人生の倫理、規則のようなものになっている、分かるでしょ。ええ、私はとても長い間独りぼっち生きている、もう全然男たちと関係を持ってない。それは際立ったことだけど、同時に、自分自身の中で、こんなふうに、純粹さを保っているの。なぜなら私は私の持つ僅かなエネルギーを失わないから、いつも夢見ているから、いつも待っているから、それに現実以外は...何かを待つほうがいいの、分かるでしょ！希望は台無しにするけど...私はたくさん話してる、でも多分私は何も期待していない...おお、うんざりだわ！」と彼女の恋愛観、人生観を披瀝する。デルフィーヌが恋に晩生の、心の純粹さを保つことを重視する真面目な女性であることがよく示されている。

この場面では、自分の発言を客観化するための、「je」の代わりに用いられている二人称「tu」の全体に渡る使用の理解が難しいところである。

二人はまた岸辺を散策し始めるが、デルフィーヌの眼に、釣り道具、玩具、お土産、パラソル、エアマットレス、日焼け止め製品などを売っている浜辺の店の正面の上の看板に「緑の光線」とあるのが飛び込んでくる。さらにショウウィンドウに銅製品を置いた、通りの角にある別の店の正面にも「緑の光線」と書かれている。そこでデルフィーヌは「不思議な偶然だわ...！信じられない！」とつぶやく。それを何も理解できないジャックは彼女を見つめて「何のこと？」と尋ねる。デルフィーヌは「あなたにはそれを理解できない...知ることはできない...私と一緒にあそこへ...日没を見に行かない？」と言って、海に突き出た右側のある地点を指し示す。ジャックは「い

いよ」と、そして「ねえ、僕は不思議な偶然のことを尋ねたかった」と云う。二人は岬までやって来て海に面して、ベンチに腰掛ける。「月曜は仕事なの？」と聞くジャックに、デルフィーヌは「いいえ、まだヴァカンスは幾日もある」と答える。するとジャックは「僕と一緒に、バイヨンヌの近くで数日過ごしに行かないかい？」と誘う。デルフィーヌは「私のことをからかっているの？冗談言ってるの？」と答えるが、ジャックは「僕は冗談を言っていないよ」言い訳する。デルフィーヌは「いえ言ってるわ！」と言うが、ジャックは「でも、なぜ僕が冗談を言っていると思うんだい？」と問う。デルフィーヌが「それじゃなぜ私があなたと一緒に数日を過ごすことを望んでるの？」聞き返すと、ジャックは「なぜならそうしたいから、それだけのこと。とても単純なこと。一緒に行こう。来てくれよ！優しく...そうしたくないかい？さあ、いいと言ってくれ...」と再度誘う。デルフィーヌは「いえ、でも待って！」と、ジャックは「そうしてくれたら僕は嬉しいなあ、ね！」と言いつつ。デルフィーヌは「いえ、待ちましょう。少し待って」と海を見つめながら言う。ジャックが「何を？」と尋ねると、デルフィーヌは「ほんの少し待ちましょう。少し我慢して」と答える。ジャックが「でもねえ、何を待ちたいんだい？」と聞くのに、デルフィーヌは「緑の光線のこと知っている？」と尋ねる。ジャックは「いいえ、それは何のこと？」と言うのに、デルフィーヌは「それは日没の最後の光線です。ジュール・ヴェルヌがそれについて本を一冊書いた」と説明する。ジャックが「ああ！僕はそれを読んでない...それは幸福を運ぶものなの？」と云うと、デルフィーヌは「まったくそうゆうことでもない。識ることができるから...」と答える。ジャックが「何を？」と尋ねると、デルフィーヌは「後でそれをあなたに言うわ」と云う。太陽が海の上で沈み始める。ジャックが「君は何を識ることが出来ると言っていたの？僕はとても知りたいなあ」と言うと、デルフィーヌは「私も同じよ！」と応ずる。ジャックは「僕は理解できたと思う」と云う。太陽はつい今しがたよりさらに下にある。海に沈みこむ。デルフィーヌのすすり泣きが聞こえる。ジャックが「泣いてるの？」と尋ねると、デルフィーヌは「泣いちゃいけないわね！」と答える。ジャックは「泣かないで...見て...待って！」と言いつつ、デルフィーヌは体を起こす。海に沈む太陽の最後の光線...水平線の、太陽が消えたばかりの所に緑の小さな点が描き出される。そこでデルフィーヌが「ええ、(見えたわ)！」と叫ぶ。デルフィーヌは、高揚した様子で、水平線の方に指を差し出す。ジャックの呆然としたまなざし、次いで彼は眼を眩ませて彼女を見つめる。

おわりに

こうして本当に緑の光線を見ることのできたデルフィーヌが、それまでの孤独で不幸な生活から脱し、希望に満ちた人生へ歩み出すことができることの可能性を暗示して映画は終わる。

それではこの緑の光線の真に意味することとは何であろう？それはジュール・ヴェルヌの小説『緑の光線』に〈モーニング・ポスト紙〉の記事として、この光線の本質を示す次のような文章が載せられている：「あなたたちは、時々海の水平線の上に沈む太陽を観測したことがあるだろうか？きっとあるでしょう！その円盤の上部が水の線をかすめ、まさに消え去ろうとする瞬間まで眼で追ったことがあるだろうか？多分あるでしょう。しかし空が霧から開放され、完全に澄み渡っている時、この輝く天体が最後の光線を放つ丁度その瞬間に起こる現象に気づいたことがあるだろうか？恐らくいいでしょう。さて、あなたたちがこの観測をする機会——それはごくまれにしか現れない——を初めて見つける時、あなたたちの網膜を射に来るものは、人が信じているように、赤い光線ではない、それは「緑」の光線であるだろう、しかも驚異の緑だ、いかなる画家もそのパレットの上で手に入れることができない緑、自然が、植物のあんなに多様な色調の中にも、もっとも澄んだ海の色の中にも、決してその色合いを表したことのない緑！もし天国に緑の色があるなら、それはあの緑以外のものでありえない、それはきっと「希望」の真の緑である」（Jules Verne « Le Rayon vert » Hachette, 1968, p.22）。即ち、緑の光線とは極めて稀に天国から漏れ来る奇跡の光のことであり、人が地上において観ることができる唯一の天国の徴なのである。

文献

- DVDエリック・ロメール『緑の光線』紀伊国屋書店、2004
 VHSエリック・ロメール『緑の光線』SONY、1986
 渡辺芳敬編『緑の光線』駿河台出版社、1990
 Jules Verne『Le Rayon vert』Hachette,1968
 ジュール・ヴェルヌ『緑の光線』中村三郎訳、プレジデント社、1979
 エリック・ロメール『美の味わい』勁草書房、1988
 中条省平『中条省平の「決定版！フランス映画200選」』清流出版、2010
 蓮実重彦『映画狂人のあの人に会いたい』河出書房新社、2002
 『ユリイカ 特集エリック・ロメール』2002年11月号、青土社
<http://sakurako0720.at.infoseek.co.jp/special/rohmer/aino.html>

